

RYO-MA倶楽部

世代を愛し、郷土の歴史を繋ぐ

越後RYO-MA倶楽部

(えちごりょうまくらぶ)



河井継之助記念館
友の会会報

第15号

2014.3

編集・発行
河井継之助記念館
新潟県長岡市長町1丁目1675-1
〒940-0053
Tel.0258-30-1525
Fax.0258-30-1526
頒布価：50円（送料別）

平成二十五年度から、河井継之助記念館友の会に入会いたしました「越後RYO-MA倶楽部」は、自ら活動することによって故郷長岡を盛り上げることを目的とした、若者を中心とした市民活動団体です。越後長岡にあつて坂本龍馬を名乗ることに度々のご質問をいただきますが、これには幕末の坂本龍馬に倣つて

「ボーダーを越えた人繋ぎをしよ」との趣旨があります。その活動の一環として、長岡の優れた個性である郷土史の学びを呼び掛けているのが「千校塾」です。学びと申しましても学術的なものではなく、主に長岡の先人を毎回ワンテーマに挙げ、その生き方を物語的に楽しみながら共感を得るというスタイルになっております。既に開催は十回を数え、白峰駿馬をテーマにした回では七十人を超える参加がありました。内容は日頃先輩方が聴講されるよりも易しいものですが、若年層への郷土史普及に確かな効果があると見ております。これは、河井継之助記念館の稲川明雄館長を中心とした講師の皆様からの、活動主旨へのご理解によるものだと

感謝をいたしております。

千校塾開催の初期に、まず私たちは河井継之助と「常在戦場の精神」について学びました。常在戦場は駅前大手通で「米百俵の精神」と並んで掲げられ、対外的にも誇るべき長岡独自の精神であると理解していますが、一般的にはまだまだあまり親しみのあるものではありません。私たちは千校塾での学びから常在戦場の趣意を「先ず「常に時代の変化に備える」と解釈しております。手探りではありませんが、皆が各々の生活になぞらえてそれを語り合うのも大変に面白いものです。ある者は何事にも常に当事者意識を持つことだとし、またある者は、常に家族の傍らに在つて愛し護ることだと語りました。この様に、同郷の先人の足跡を身近から順に理解して行くことで、やがては郷土史伝承の担い手としても、史実により深く分け入つて行く人材が現れると考えております。

有用なものには成り得ません。

平成二十五年度の会津藩公行列では、越後RYO-MA倶楽部も長岡銃士隊に扮して参加いたしました。この時に浴びた長岡隊と河井継之助への熱烈な声援は忘れ難く、郷土の先人の足跡が現在の私たちに繋がっているのだと強く体感させられるものでした。その後、長岡の米百俵まつりでは、坂本龍馬率いる順動丸隊を精一杯演じさせていただきました。その直後、長岡の米百俵として「長岡藩士を演じたい！」というのもまた参加者の素直な思いでした。二つ行列の際に私たちがご指導いただいた廣井晃さん、星貴さんは共に、河井継之助記念館友の会の幹事を務められています。先駆ける同郷の皆様が学ぶこともまた、先人の文脈を引くことと心得ます。

峠抄

とうげしやう ⑭

「長岡の雪がこんなに少ないとは思わなかった」一月末、お客様がそう驚かれています。今年の長岡の冬は例年にくらべ積雪も少なく、寒さも穏やか。長岡人としては良いあんばいの優しい冬ですが、そのお客様は雪を見れず、少し残念そうでした。継之助であつたらこんな陽気な空模様に浮かれたりしたでしょうか。そんなことを思っていると、一階展示の掛け軸、『常在戦場』が目に入り、思い直しました。やはり継之助はこんな穏やかな冬に対しても、気を抜いたりしなかつたでしょう。『常在戦場』は武士の守り札でもあつたといえます。怠慢を許さず、常に戦場に在るといふ気持ちで生活せよとこの四字は教えてくれます。継之助ならきつと、この暖かな冬のなかであつても『ここは越後長岡。来年の冬の厳しさを思いしかと備えよ』そう言うでしょうか。また例えそんな豪雪であつても、それを見て驚き喜ぶお客様を笑顔で迎えできたらし思います。

(布川)

越後RYO-MA倶楽部のプロフィール
若者の意気高まる講演活動の他に、歴史の活動
千校塾（郷土史講座、言葉の活動「信天翁」句
会）、畑の活動「畚」農作業体験など、故郷の文化
で世代を繋ぐ。

『峠』の越後長岡を歩く ⑫

連載

司馬遼太郎の『峠』に描かれている「越後長岡」の風景を現在に訪ねるシリーズ。今回は長岡市の信濃川、西軍上陸の地を歩いてみました。

●峠下巻・新潮文庫eBookページより

十八日の夜になった。

雨がやみ、月が出ている。この夜、官軍は暗さにまぎれて、隠密行軍を開始し、信濃川西岸の大島村から榎下村にまで至った。

「ここから渡河し、一挙に長岡城を攻める」

と、長州の三好軍太郎は配下の指揮官たちにはじめて企図を明らかにした。

が、この日、まだ雨が上がったばかりのことでもあり、水流がさかんでとうとう渡河できそうにない。

朝日山を攻略できず苦戦していた新政府軍は、信濃川を渡り一気に長岡城を攻める作戦をあまりみだします。この提案は、奇兵隊の三番隊小隊長堀潜太郎によるものといわれ、軍監の三好軍太郎も賛成し、奇兵隊の先行で実施しようとした。一方の長岡軍は、長岡城の西に走る信濃川は天然の要害であり、連日の雨による増水で川幅は広く、渡河は出来るまいと予想し、主力を榎峠・朝日山において城の

守りは手薄だったといわれています。

当日朝の天候は、視界を遮るほどの濃霧だったと伝えられています。慶応四年（一八六八）、

五月十九日午前四時、本大島村（大島地区）・榎下村の新政府軍陣地から、激しい砲撃があ

り、ついで三好軍太郎の率いる奇兵隊・長府藩兵が七艘の舟

で、折からの濃霧に紛れ、本大島村から信濃川を渡りました。

寺島（長岡市中島二）に上陸した彼らは、二手に分かれて城下へと進みました。この攻撃に

長岡藩兵は不意を突かれ散乱して敗走、ついに長岡城は落城してしまいます。

現在、大通りを外れた中島一丁目の裏通りへ入ると「西軍上陸の地」として、碑が数個ひっそ

りと立っています。中央に東西

両軍戦死者之墓、その横奥に長岡藩士の小さな墓石が二つあり、右手に明治戊辰戦蹟顕彰

碑、左手に明治戊辰戦蹟、と各々碑に刻まれています。この

ほか、山県狂介が北越戊辰戦争中に詠んだ有名な和歌の歌碑や、場所の歴史をつづった解説版等が立っています。

北越戊辰戦争を語る上で、こ

こは落城の発端地ともいえます。長岡城を巡る攻防により、

まちのほとんどが焼き尽くされたことを考えれば、まさに勝敗の鍵は信濃川の渡河だったといえるのではないのでしょうか。

（高柳）

※参考文献
新潟日報社 戊辰戦争140年 中越の記憶
稲川明雄 決定版河井継之助

遠方からの客人

●インタビュー⑬ 火の国熊本から雪国長岡へ



平成26年2月5日

藤田皆人さん (21歳)

熊本県八代市からお越しの藤田皆人さんにお話を伺いました。

●ご出身が

藤田さんの開口一番は「寒いですね」でした。この日、長岡の最高気温は予報では零度の真冬日。暖かい熊本県からいらした藤田さんには特に寒く感じられたのかもしれませんが、雪国長岡へはどっしりとした問いに「父が仕事

で長岡に赴任しているので、二月いっぱい予定で遊びに来ています」寒さのせいから少し首をすぼめるような仕草で「今日は山本五十六記念館を見学に来たのですが、そこで河井継之助記念館を勧められて立ち寄りました」

●記念館の印象は

「建物の外観はこじんまりとした感じですが中に入ると展示品も多く、初めての私にも解りやすくして良かったです。司馬遼太郎の『峠』の原稿も展示されていました。主人公の河井継之助のことはほとんど知らず『峠』も読んだことがありません。でも展示を見てもっと継之助を知りたくなりました」

●長岡で気になることは

「米どころ長岡は酒造りが盛んな所と聞きました。蔵元も多くあるそうなので美味しい地酒を堪能して帰りたいです」

（西川）

中島一丁目の通りの一角に入ると、石の柵で囲われた敷地がある。石碑・墓石のほか、山県狂介が朝日山の戦い前後に詠んだ歌碑や、この地の歴史をつづった解説版等が立っている。

東西両軍戦死者之墓



西軍上陸の地



河井継之助記念館が報道されました

- ・2013/06/07 『発見！八重と新潟 知られざるつながり』（NHK新潟放送 きらっと新潟）
- ・2013/10/14 『霸王伝説「最強の幕末志士は誰だ!？」』（NHK BSプレミアム）
- ・2013/12/16 『若大将のゆうゆう散歩』（UX新潟テレビ21、BS朝日、テレビ朝日）
- ・2014/01/18 『八十里越・会津街道物語～越後と会津とを継ぐ共助の道～』（UX新潟テレビ21）

※上記TV放送のほか新聞・雑誌・書籍等にてご紹介いただきました



番組ナビゲーターの林修さんと

今年には記念館や河井継之助について、テレビ・雑誌で取り上げられる機会が多くありました。今回はテレビ放送された番組の内容を一部、ご紹介したいと思います。

●発見！八重と新潟 知られざるつながり

やはり今年は何といっても大河ドラマ『八重の桜』関連の企

画が目白押し。NHK新潟放送局の番組『きらっと新潟』でも、主人公新島八重が生き抜いた時代を新潟で人々はどう立ち向かったのかを軸に、記念館のガトリング砲などが大きくあつかわれました。

番組は、ゲストのハイキングウォーキングの二人によるクイズ形式をとりながら、記念館職員高柳による「一分間に何回ガトリング砲を回すことが出来るか!」の実験、館長の解説などを紹介。笑いを交えつつ、継之助と会津の結びつきについて深く取り上げていました。ちなみにガトリング砲は、一分

間に三十九回まわせるという結果が出ていましたが、皆さんもぜひ記念館にお越しの際は、試してみたいかががでしょうか。

●若大将のゆうゆう散歩

テレビ朝日系にて放送中、若大将でお馴染み、加山雄三さんの冠番組『ゆうゆう散歩』。今回は長岡を舞台に放送されました。

加山さんが長岡駅を降り、はじめに足を運んだのは我らが河井継之助記念館。稲川館長と館内をまわりながら、継之助の「常在戦場」の書に目を止め「我此処にあり。人に尽くすために俺が居るんだ。そういう意志を持っているような気がしてしょうがない。」と話されました。これはまさしく継之助の信念そのもの。加山さんの目利きに驚く一方で、さすが継之助の書、伝わるものだと感心しました。

●八十里越・会津街道物語

越後と会津とを継ぐ共助の道。この番組は、三条・長岡・加茂と三市で開催された「八十里越物語展」と連動して放送されました。二〇一三年流行語大賞受賞の林修先生を番組ナビゲーターに迎え、継之助を通じて越

後、会津の交流の深さを史実に基づいてたどる内容です。

林先生は河井継之助ファンということで、撮影中はガトリング砲をまわしながら、昔幼い頃に（ガトリング砲ごっこ）をした話をされていました。

番組では、八十里峠をぬけ南

女たちの戦い

●パネル紹介



教育を受け、賢妻すがに支えられた。また継之助亡きあとは、彼女たちが河井家名再興をはたす。そしていつの日か継之助の功績が正しく評価されることを願った。天命を全うし、次の世代を育て継之助の意志を繋げようとする女たちの熱情が、このパネルのひときわ目立つ赤い色に込められている。

戊辰戦争が長岡の大部分を焼き、多くの若い男たちが犠牲になった。継之助が只見の地で没し、長岡藩が降伏したのちの長岡城下の消失率は八十五パーセントだったという。そんな惨状から這い上がり、新しい生命を育み、越後長岡を復興させたのは長岡の女たちであった。

有名な小林虎三郎の主張「食べられないからこそ教育が大事だ」という米百俵の精神と繋がるのである。

長岡の女たちは戦争を生き抜き、時代を育み、継之助の死後もその郷土を思う心は絶えることなく今も受け継がれている。

継之助は生前、母貞に厳しく

（布川）

河井継之助はどういう人物？

連載

その⑬ 継之助の従者・大崎彦助のこと

従僕の大崎彦助は、のちに通

休と名乗っている。栃尾組来伝

村出身の彦助には、若い頃から

志があった。庄屋の子弟は、行

儀見習いに長岡城下の武家屋敷

に奉公する者は少なかったが、

彦助のように十三歳から百石取

りの佐野与惣左衛門の屋敷に漢

学修行のため奉公するのはめず

らしい。

佐野は学識もあつたし、郡奉

行などの郡方役人も勤めたの

で、彦助の父が頼み込んでの奉

公だったらしい。

佐野家の屋敷は城下今朝白町

にあった。河井継之助の屋敷と

は、そう遠くない。やがて、彦助

は佐野よりも河井継之助を敬慕

するようになった。

継之助が江戸遊学に行くとき、

勝手に江戸の遊学先までたずね

ていった。驚いたのは継之助で、

彦助を懇々と諭し、三国街道大

宮の宿まで送り、やつのこと

で帰郷した。

継之助と彦助は身分を越えた

友といえるだろう。一方は武士

であり、他方は農民の子であつ

たが、友情もめばえた。

たとえば山中騒動の際、継之

助は鎮静にあたつて、書をした

ためたが、それを書き終ると、

彦助に「これで良いか」とたず

ねている。「旦那様、よろしいで

す」と答えると、継之助は満足

そうにならずいたという。

そんな光景を山中村の農民は

見聞していた。「継之助も豪儀

だったがたつた二人随行してきた

従僕の彦助の姿勢態度も立派だ

つた」と後年村人はふれまわつ

た。

槍一筋を担いで、継之助のあ

とを追う彦助の姿が偲ばれる。

戦争中、彦助は新政府軍につ

かまり、城下玉泉寺脇の牢獄に

つながれたことがあつた。長岡

城奪還戦のとき、継之助は彦助

を気づかつて、いつときも早く解

放を部下の将士に頼んでいる。

牢獄が解放されて、彦助が無

事だと知ると継之助は大層、喜

んだと伝えられている。

その彦助が戦後、直接、在所

の来伝村には帰らず、蒲原の

村々を放浪したことがあつた。

継之助の関係者の処断が噂され

ていたから、彦助は身の危険を

感じたのかもしれない。自分に

危害が加わらないと知ると、来

伝村に舞い戻り、名を通休とあ

らためた次第である。

その大崎通休が河井継之助を

回顧したことがあつた。学識は

幕府の昌平坂学問所に入れるく

らいの能力を持つていたから、

継之助の漢文や詩歌の作品を今

に伝えた。

なかでも次の箴言が圧巻であ

る。

義の存する所、孤危を冒す

も、必ず心の宜しき所を吐

き、百折を経ても回らず

。

歴史家の安藤英男さんも、そ

の著『河井継之助の生涯』のな

かで「継之助の政治をとるに当

たつての、牢固たる信条であつ

た」と説明しているが、改革で

も政治でも、継之助には必ず義

を大切にし、孤立しても真剣に

主張を繰り返せば、必ず、意見

に同調して協力してくれるもの

だと大崎彦助に説明したのでら

う。

『河井継之助傳』では山中騒

動の前後に、信濃川を下る際、

したのである。

盗賊方の一人が脱出に成功し

て藩庁へ注進した。早速足軽小

頭の田部武八が率いる足軽二十

名が現場に急行した。現場は盗

賊方三名は抜刀し、農民四名を

人質にとつた形で、鉞や鎌を持

つて取り囲んだ農民たちとら

みあつていた。

そこで、田部の判断で、双方

が囲みを解き引き揚げることに

なつた。

この処置に対して、まず、郡

奉行河井継之助が田部武八を裁

断する。

藩庁において、田部は「顛末

を報告し、越権(盗賊方を差し

置いて)の取計らいをしたこと

を詫び、どのような処分でも受

ける」と言上している。それに

対し、継之助は「万一群民等に

して城下に押し寄せることにな

れば一大事であつた。その方が

死を賭して臨機の処置をし、犠

牲者を出さなかつたのは、まこ

とに以てその道にのつとつたも

のである」と誉めた。

田部らの関係者は、ほつとす

るとともに、河井継之助の当を

得た判決に感激をしている。勿

論、山中村の騒動も継之助の裁

断で事なきを得た。

(稲川)

「塵壺」を読む

13 連載

健脚の継之助ですら「遙るか来り、ハリあい二思しナリ」と思ふほどの距離をはるばる松山までやってきた。藩政改革の基本を学ぶという目的のためには、山田方谷に会わなくてはならない。彼は松山を出立し、道すがら新しく開墾された土地があることをチェックしている。高梁川沿い三里ほど奥まったところに、方谷の西方村長瀬宅（現高梁市中井町）はあり、昼頃到着した。方谷はこの場所へ引越しをしたばかりで、家屋はまだ工事中で、手狭ではあったが、継之助は面白いところだと感想を述べている。

長瀬宅を尋ねてほどなく、方谷と会い色々話をしたようだ。塵壺には記されていないが、塩谷宥陰の紹介状をたずさえて入門をお願いしたという。これが弟子入りの決め手とも言われている。継之助は自らの胸中を開いて頼んだところ、方谷はよく話を聞いてくれた。とはいえ方谷は「与得御答可仕」と答えたというから、弟子入り許可の返事は後ほど返された。一方で継

之助はそれを「既ニ受る之口上ナリ」、つまり既に入門を許可された言いぶりだと綴るあたりに彼の興奮ぶりがうかがえる。今夜は泊まっていきなさい、とでもいわれたのだろうか、随分親切に言われてその夜は長瀬宅に宿泊した、と書かれている。ちなみに日記の日付の上に□のマークがあり、その日は方谷宅に宿泊したしるしとなっている。

その夜、さまざまな話題を方谷と話しこんだようだが、全ては記されていない。その中に、佐久間象山はどのような人物であるか、という話題があった。継之助が江戸にいたころ佐久間象山に通っていたことと、かつて佐藤一齋門下で、方谷が象山と激論を交わすようなライバルであったことから出た話題であろう。象山は「温（おだやかさ）、良（素直さ）、恭（うやうやしさ）、謙（つましき）、讓（へりくだる）」の何れもない人物と方谷に評されている。ちなみに塵壺につづられた「温良恭儉讓」（儉は正しくは謙）とは、論語の学問にある言葉で、人に意見を求められる孔子の

よき人柄をさしている。続けて封建の世で人に使われることが出来ない人物はつまらない、とも方谷は称しており、象山の「自分が、自分が」という気質に対して苦言を呈しているともいえる。深読みをすれば、方谷は継之助にも象山と同じ「自分が、自分が」という気質を見抜いて釘を刺したともいえるだろうか。

さて継之助がぜひ学びたいとした、山田方谷の藩政改革の内容はどのようなものなのだろうか。今回はその中の一つ、藩札刷新政策について取り上げてみたい。

実はこの話題は、継之助が備中松山に入る前、「松山札ハ随二」というくだりの記述と一致する。彼は休憩のため茶屋に入り、そこで藩札の話に耳にする。乱発と偽札によって信用を失っていた藩発行の五匁札を、ある時何日までとおふれをだして引替し、これを皆が見ている目の前で全て焼き払ってしまったのだという、それゆえ以後新しくなった五匁札の信用はこの地域随一なのだ、という内容である。

江戸時代のお金は、幕府の発行する貨幣以外にも、各藩が独

自に発行する藩札という紙幣が流通していた。本来藩札は兌換紙幣で、藩は交換を要求されれば同額の正貨金・銀などと交換しなければならぬ。しかし実際には、貧困にあえぐ諸藩は交換準備金である正貨をも使つてしまひ、ほとんどの藩札は不換紙幣と化していた。備中松山藩の場合もご多分に漏れず、準備金のないままの増刷によるインフレ、そのうえ偽札まで出回つて、藩の発行する五匁札は藩民の信用をまるで失っていた。

この藩札改革において方谷


は、流通している五匁札を、三年の期間内で買い取りするお触れをだした。両替期限の三年が経過した九月、高梁川河川敷にて一大デモンストレーションが行われた。三年間買い取り続けてきた五匁札を一齐に焼き払うと

いうもので、宣伝効果もあって当日の河川敷には大群衆がごったがえしていた。河原にはうずたかく積まれた五匁札の山がいっくつも置かれ、方谷が現れると五匁札の山に次々と火が放たれた。朝八時から夕暮れ四時までかかり、ようやく終了したという。その後、鉄の事業成功により巨額の両替準備金を得ると、方谷は満を持して「永銭」という新しい藩札を発行した。この永銭は発行されるや絶大な信用を民衆から得、松山藩を越え他藩にまで流通した。

初めて尊敬に値すると感じる師と出会った継之助。経済の流れを知り、藩財政を立て直す方策を学びたい、と意欲的な十三歳の夏のことであった。（高柳）

※参考文献「山田方谷物語 山田方谷生誕二〇〇年記念事業実行委員会

継之助 写真募集!



塵壺にかかれた
福禅寺対潮楼
(広島県福山市鞆町)



対潮楼から井天島、仙酔島を望む

紙面に掲載する、河井継之助に関する写真を募集しています。（掲載は不定期）読者の皆さんが足を運んだ「塵壺」に登場する場所の現在の写真」「戊辰戦争史跡」などのスナップ写真を、お名前、撮影場所、ひとことをそえて、事務局までお送り下さい。遠方からの投稿も大歓迎!

第七回交流研修旅行報告



老舗割烹「東忠」前にて

時のお話をうかがい。小千谷をあとにし戊辰戦争伝承館へ。館内では八丁沖を二階から見渡しながら解説に耳を傾けました。そしてバスは最後の見学地、悠久山へと向かいます。そこでは点在する碑の説明を受け、また戊辰戦争の戦死者や西南戦争で殉死した旧藩士を祀っている蒼紫神社に手を合わせました。

参加者の方から「地元を巡るのいいね、もつとじつくり見たいね」の声を頂き、

●東忠「蒼龍弁当」の満腹感！

九月八日小雨が降る中、今回は河井継之助を語る上で欠くことのできない小千谷と長岡の戊辰戦争の史跡巡りに三十一名の皆様にご参加頂きました。

今年春、濃磨を迎えて退職。まず旅に出たいと思った。長年見てきた東京（江戸）を離れて、私のルーツである越後へ。九月に入り、ようやく実現した三泊四日の退職記念旅行。その最終日、河井記念館友の会の研修旅行だった。小千谷は河井継之助が苦悩した地。その無念の思いを偲びたいと東忠へ：河井ゆかりの蒼龍弁当。しかし、ああなんと食後の満腹感！偲ぶ想いをすっかり忘れ、東京へ帰って来てしまった。無念なり！

—百崎「すえ」(東京都)

●『峠』再々読となった史跡めぐり

司馬遼太郎の『峠』を二十年ほど前に読みました。自分の故郷が描かれている小説——程度の感覚でしたが、幕末史に傾倒するなかで、会津藩とともに長岡藩、わけても河井継之助の存在の特異性に感動し、改めて貪るように

皆様には有意義な時間を過ごして頂けたと思います。また、日程を無事終えることが出来たのは皆様方のご協力のお陰です。有難うございました。(伊佐)



激戦地の朝日山

読み直しました。今回の戊辰戦争史跡めぐりで史実の主な現場を訪れ、激烈な歴史の様子を漂う空気のなかで実感することができました。ご尽力いただいたすべての方々に深く感謝いたします。『峠』また読み直します。

—元井 茂(栃木県)

●戊辰戦争史跡めぐりに参加して

当日は生憎の天候でしたが、久しぶりに長岡・小千谷の戊辰戦争史跡を巡れてよかったです。稲川先生の名解説も聞けて、バスの車内でも楽しくすごせました。今回、一番の楽しみは初めて訪問する北越戊辰戦争伝承館でした。確かに二階に上がると、八丁沖がよく見渡せました。その他にも、東忠での食事や慈眼寺の会見の間での住職の話等、現地に来ないと味わえない楽しみもあり、面白かったです。

—北嶋文男(東京都)

河井継之助没後百四十六年祭法要

十月六日、河井継之助の百四十六年祭法要が長岡市にある栄涼寺にて催されました。今回も河井家八代目にあたる河井弘安さんをはじめ、県内外から多くの方に参列をいただきました。本堂にご住職の読経が静かに流れる中、参列者は継之助の肖像画が掲げられた祭壇に向かい、肅々と焼香し継之助を偲んでいました。焼香後、弘安さんが「百四十六年を経た今でも長岡の方々にこのような法要を催していただけるのは大変有難いです」と感謝の言葉を述べられました。その後、参列者全

(西川)

●法要に参加して

十月六日(日)晴天のもと長岡栄涼寺にて行われた河井継之助没後百四十六年祭法要に参加し墓参りさせていただきました。継之助子孫の直系八代目弘安氏、本家寛治氏、長男恭一氏も参加された青善の市民の集いでは、食事をしつついろいろな話をお聞き出来、また、友の会の方とも親交を深めることが出来、大変楽しく意義深かったです。これからも記念館の催しに参加するとともに継之助の足跡をたどりながら継之助の思いを感じたいと思っています。

—金子隆夫(東京都)

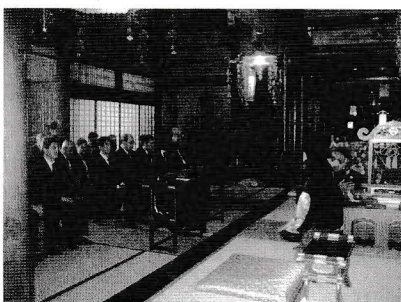
●友の会に入会して

平成二十一年四月二十五日高校時代の師、山本清先生による「峠の碑建立」について講演を聴講してより「友の会」に入会、翌二十二年只見町の「墓前祭」に参加する。更に二十三年会津若松市本光寺にての法要に参列、幸運にも鶴ヶ城内の見学や「保科正之展」も催されていた。「西国橋は架けるが天守閣は再建しない。」的確な会津藩政改革は、継之助の長岡藩政改革に共通項を感じて今年栄涼寺に百四十六年祭法要に参列する。次年は八丁沖ウォークを自指す。

—新保順之(長岡市)



栄涼寺墓前

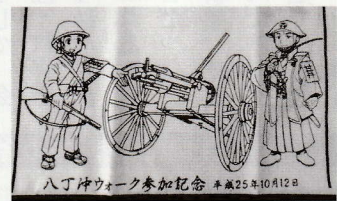


河井継之助没後百四十六年祭法要

第三回 八丁沖ウオーク



富島古戦場パークにて



渡河記念の手ぬぐい

十月十二日、第三回八丁沖ウオークが開催されました。今年度は前日からの雨でやむなくウオークは中止となり、バスでのゆかりの地めぐりに変更になりました。出陣式のあと、参加者約五十名が二台のバスに分乗し出発です。地元新組地区の御協力により解説を交えつつ、例年の渡河では訪れることの無い「割元庄屋清水家」「貞心尼と閻魔堂」にも足を運ぶことができました。

最後は富島古戦場パークにて、全員で雨雲を蹴散らすよう

— 大久保紀美恵 (長岡市)

に勝鬨をあげました。その後、新組コミュニティセンターに会場を移し稲川館長と「北越戊辰戦争伝承館」安藤館長による講演会も行われました。聴講者は、八丁沖での奪還戦の凄まじさを

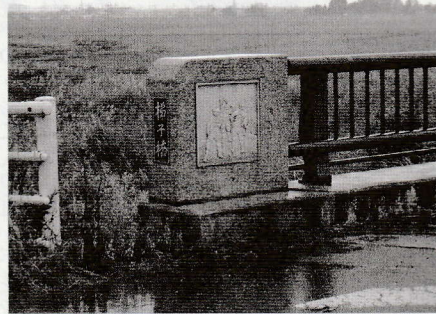
●ブーツよ

今回の記念品に絵入り手拭いをいただいた。その兵士の足元は、足袋と草鞋だ。武者姿の星さん達も同様のいでたちである。北越戊辰戦争は、雨が多かつたし、はしご橋周辺の葦原は当時に近いという。八丁沖渡河に草鞋履きとは哀れ！戦場故に、着替えもなく、ぬれた衣服のまま跋涉する兵士達。ふと継之助愛用のブーツに目がとまる。丈夫な履物だと行軍も助かっただろうなあ。そっぴい、土方、龍馬もブーツ姿でしたね。

— 松原越男 (長岡市)

●八丁沖の歴史の一端に触れて

田所理事扮する河井総督の掛声のもと、参加者全員のエイエイオーの勝鬨を合図に、八丁沖ウオークがスタートした。あいにくの雨のためバスでのコースめぐりとなったが、各地で勝鬨を上げたり、地元の方から貴重な話を聞かせて頂いたりしているうちに、北越戊辰戦争のシンボルともいえる八丁沖の歴史にいつしか魅了されていた。長岡人としてもっと早く、もっと若い頃に、こういう機会に接することができていたら……と、思っ



梯子橋から八丁沖を望む

感じるとともにお二人の話に引き込まれていらつしゃいました。続いて、参加者ひとりひとりの名前が呼ばれ、友の会幹事の田所さんより渡河記念の手ぬぐいが手渡されたのでした。こうして雨の渡河作戦は盛況のうち閉会となりました。(柴田)

記念館日誌 某月某日

今年も恒例の「越後長岡ひなものがたり」が催され、反町尚子様所蔵の「与板藩主びな」が飾られておりました。

そんなある日のこと、「お雛様を見せてください」と女性のお客様がおいでになり、お話をうかがうと、ご自身でもひな人形を作られているとのこと。その日は知り合いのお店に作品を見せに行かれるため持参されており、私たち職員にも披露してくださいました。糸巻きの土台に広げた傘が立てられその先には、それはとても愛らしい「つる

し雛」がゆらゆらと揺れていました。お内裏様とお雛様、他にもねずみや唐辛子、草履・鈴などひとつひとつが丁寧な手縫いで作られており、作り手の優しいお心が伝わってくるものでした。小さなおひな様に大きな愛を感じるひとときに感謝です。(柴田)



つるし雛

●記念館オリジナルポストカード販売中!
(5枚組、パッケージ付300円)郵送も承ります。



平成26年度 総会・講演会・懇親会のご案内

日時:4月26日(土)午後2時から

会場:会館青善 参加申し込みが必要です。

- ・第1部:総会 午後2時~2時30分
- ・第2部:講演会(定員先着200名)午後2時45分~4時15分
演題:「峠」と横浜について / 講師:増田恒男氏
- ・第3部:懇親会 午後4時30分~6時

●河井継之助旅日記「塵壺」を読み解く会 各種講座

毎週土曜日 午後1時~3時

●今泉鐸次郎著「河井継之助傳」を読む会

第2・4月曜日 午後1時~3時

●楽しい詩吟教室:第1・3月曜日 午前10時~11時30分

*詳細は記念館へお問い合わせください。

●開館7周年講演会「会津藩の精神性と八重の桜」報告

十二月二十七日(金)、開館七周年講演会が長岡グランドホテルにて開催された。会場は五百人以上もの来場者で満席となった。講師は会津藩研究の第一人者、野口信一氏である。今回は「会津藩の精神性と八重の桜」と題し、大河ドラマ「八重の桜」の主人公新島八重の生涯にとどまらず、その意識を裏付ける会津藩の歴史を披露していただいた。

まず会津がなぜ戊辰戦争をするに至ったのか、原因の一つ、京都守護職就任の話題から講演は始まった。松平容保が京都守護職を引き受けた背景には、初代会津藩主保科正之の定めた十五条の「家訓」がある。その一条目



開館7周年講演会風景

に「徳川のために忠義を尽せ、徳川家に逆らう藩主は私の子孫ではない」があったため松平春嶽・一橋慶喜の要請を断れなかったこと、加えて会津藩の軍勢力をあてにされたことなども紹介された。

また従来の映画・ドラマの幕末の時代は、勝者である薩摩・長州・勤王の志士等が主人公であり、会津藩は敗者、賊軍、朝敵といった視点でかかれることが多かった。その点今回は負けた方からの歴史がこれほど長くかかれたのは初めてであり、会津藩の正義、誠実さが表現され、実は朝敵ではなかったことが示されていたように思う、と話された。

さらに会津藩の悲劇の原因として、会津の精神性・教育を取り上げられた。吉田松陰も訪れるほど全国に有名だった会津藩校日新館、その精神は学問だけでなく文武両道であり、「武力でもって徳川を守る」という考え

から武道には力を入れていたこと、武術の必修科目は刀・槍・弓・馬術で、山本家の砲術は選抜科目だったことなどが語られた。また侍の子どもは六歳で必ず町内の子どもグループ「什」に入り、毎日午後から当番の家にてお話を遊びをしたという。九歳の年長者を中心に自分たちで決めた決まり「什の掟」を唱え、最期に「ならぬことはならぬものです」と締めくくる。このような日新館に入る前から、遊びのうちに人の道・年長者への礼儀、同年者と友情などを育む教育があったと話された。現

在では現代版什の掟『あいづつこ宣言』という形で受け継がれているようだ。野口氏曰くドラマの第一話タイトル「ならぬことはならぬ」という言葉は、会津藩の精神性を示す言葉としてこれほどふさわしい物はないという。このような会津藩の精神が熟成されていく過程に聴き入る会場であった。

最後に年始の総集編も楽しみにと、しめくくった野口氏。氏の語り尽くせない話題と会津愛にあふれた語り口に魅了され、後ろ髪を引かれながら講演は終了した。

（高柳）

河井継之助記念館 友の会について

会員の交流や情報交換を通して継之助について親しみ、学び、記念館を応援する会です。

●会員数/正会員：553名/協賛会員：45名(3/31現在) **会員募集中**

●特典/①友の会会報「峠」配付
②会員との交流 ③催事案内・参加 ④研修旅行への案内・参加

●入会手続き

- ①申込書に会費を添えて、事務局へ持参。
- ②申込書を事務局へ送り(郵送、FAX)、会費は銀行振込または郵便振込で納入。(手数料は本人負担となります)

●年会費 ※会計年度は3月31日まで

- ①正会員(ア)小・中学生:500円 (イ)高校生以上:2千円
- ②協賛会員/一口5千円(法人の他、個人でも可)

●口座について

| 加入者名/ | 口座番号/ | 郵便局 | 00560-9-96432 |
|-------------|-------------|----------|---------------|
| 河井継之助記念館友の会 | 長岡信用金庫本店営業部 | 普1032829 | |
| | 北越銀行本店 | 普1764663 | |
| | 大光銀行本店 | 普3011256 | |
| | 第四銀行長岡営業部 | 普1560562 | |

※郵便局の場合は手数料無料の払込用紙が事務局にありますのでご利用ください。

●友の会事務局/河井継之助記念館

友の会ホームページアドレス <http://tsuginosuke.net/>

新入会員ご紹介

(平成25年11月1日~平成26年3月31日現在)

| | | | | | |
|-------|--------|-------|--------|------------------|-------|
| 工藤 雅哉 | 埼玉県鴻巣市 | 成松 直樹 | 新潟県長岡市 | 森下 勉 | 大阪府堺市 |
| 田中 新一 | 新潟県長岡市 | 森 猛 | 新潟県長岡市 | 以上5名(アイウエオ順・敬称略) | |

編集後記

●今年度を振り返ると、色々な事がありました。その中でも記憶に新しいソチ冬季オリンピック。各国のアスリートが困難と重圧に耐え挑戦する姿は勝者も敗者も感動と勇気を私達に与えてくれました。彼らのためまぬ努力とそれを支える人々の熱き思いに頭が下がります。

挑戦と言えば、継之助の生き様もある意味時代に挑み続けたと言えるのではないのでしょうか。そんなこんなにも思い巡らせながら、不勉強な自分を反省し。私達もより良い会報を目指し努力しなければと改めて思いました。

日増しに暖かくなっていく日差しに草木も目覚め始め、春はもうすぐそこに。皆様一年間ご愛読頂き有難うございました。次年度も応援の程宜しくお願致します。(伊佐)

編集人 稲川明雄 高柳吟音 布川博子
伊佐春美 西川里美 柴田三枝子
猪本爾六 渡辺静江 駒形豊
関口トシ子 高木春夫 高橋譲
田邊定雄 羽賀龍介 廣井晃
堀口晴夫 山村雅隆 脇屋雄介
渡辺千雅

構成・石川マイスツ編集部
印刷・高葉印刷株式会社